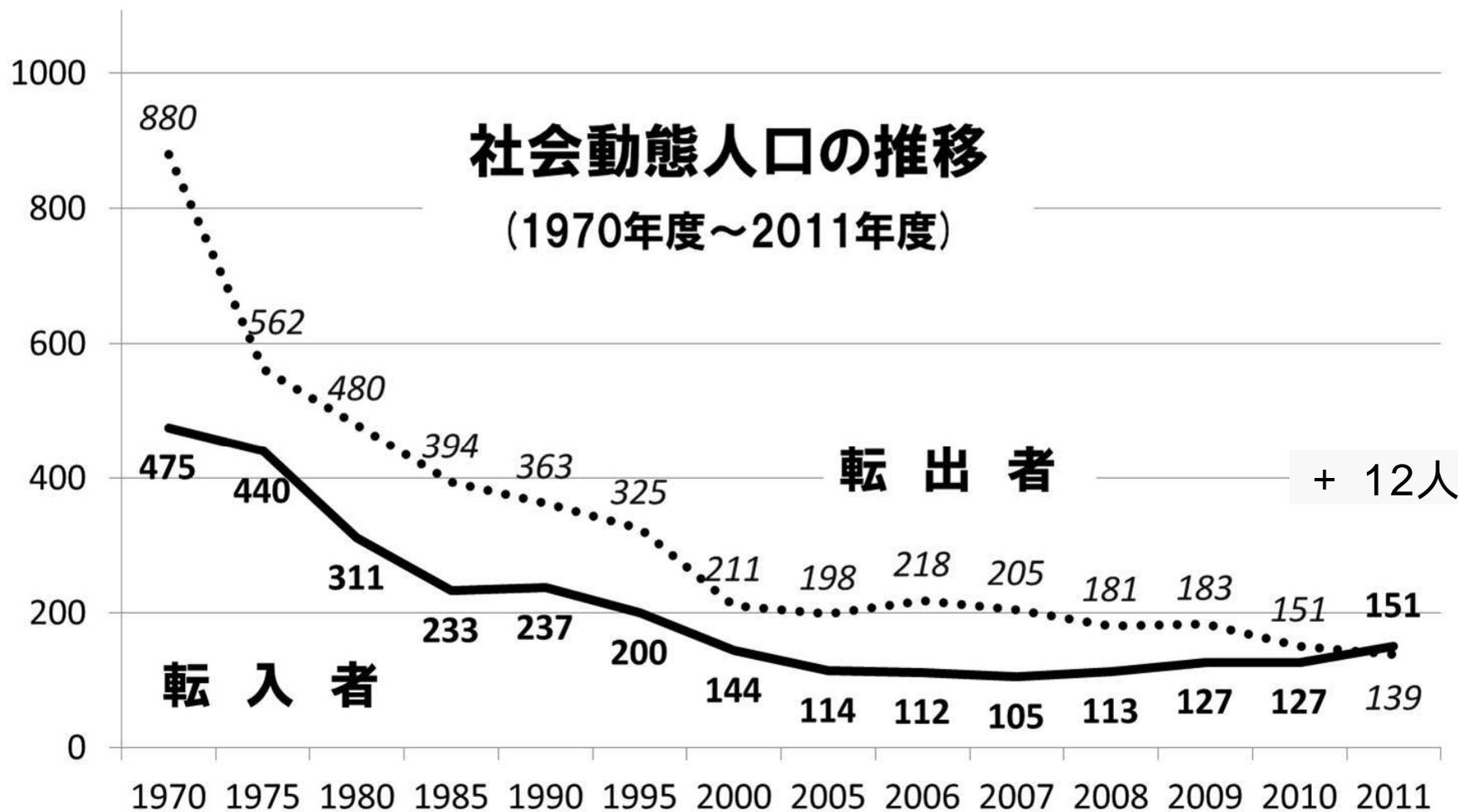


日本のふるさとをステキに変える！

創造的過疎から考える地域の未来

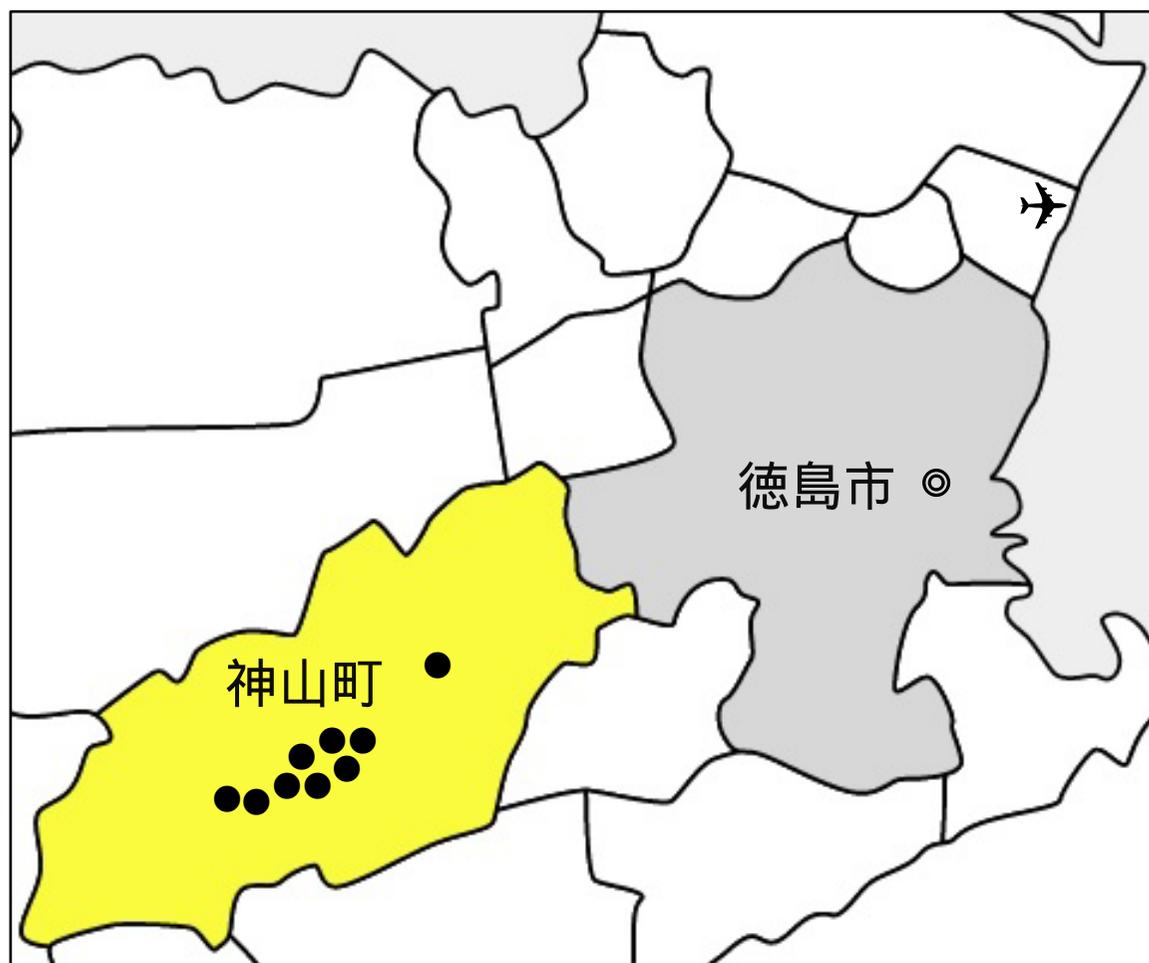
特定非営利活動法人グリーンバレー
理事長 大南信也

2011年度社会動態人口(転入者-転出者) 神山町誕生(1955年)以来 初の転入超過



2010年10月以降 ITベンチャー企業9社 サテライトオフィス設置・本社移転！

神山町へ進出した企業 (進出順、青地は予定)	
本社所在地	業務内容
• Sansan	
東京都	名刺管理サービス
• ダンクソフト	
東京都	サイト制作
• ブリッジデザイン	
徳島県神山町	サイト制作
• テレコメディア	
東京都	高齢者見守りサービス
• ソノリテ	
東京都	NPOの業務代行
• 井上広告事務所	
神山町	広告デザイン
• キネトスコープ	
大阪府	サイト制作
• プラットイーズ	
東京都	テレビ番組の情報配信
• ドローイングアンドマニュアル	
東京都	映像制作・デザイン



青い目の人形「アリス」の里帰り

米国で日本人移民の排斥運動が広がっていた1927年、親日家の宣教師シドニー・ギューリック博士が12,739体を日本各地の小学校に贈った。それぞれに名前や出身地などを書いたパスポートが付いていた。



1990年5月、ペンシルバニア州ウィルキンズバーグ市長に贈り主探しを依頼。約半年後、判明したのを機に住民30名からなる訪問団を結成。1991年8月、64年振りとなるふるさとへの里帰りを実現する。

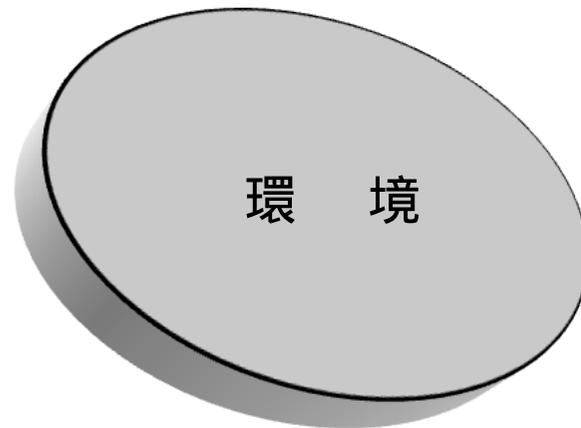
グリーンバレーの原点は国際交流。「せかいのかみやま」に向けたまちづくり

とくしま国際文化村構想(1997年策定)

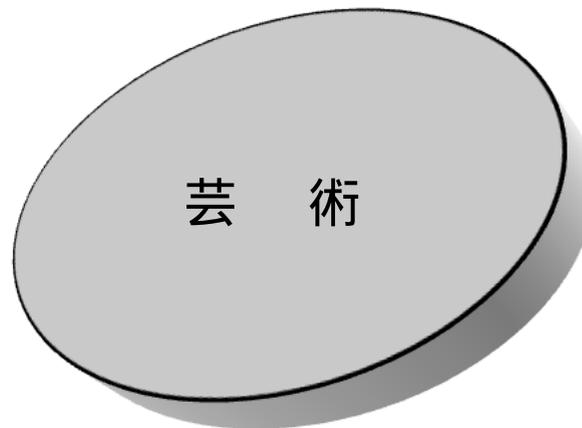
県新長期計画(97年～06年)に盛り込まれた65戦略プロジェクトの一つ。
内容は、都市に近い中山間地域での世界に開かれた多様な交流の推進。

Backcasting によるまちづくりへの転換

県が建設する施設であっても、近い将来住民が主体となって運営する時代がやって来るに違いない。地域に根ざした国際文化村を作るため住民が構想を練り上げ、県に提案を上げていこう。



アドプト・プログラム



国際芸術家村

アドプト・ア・ハイウェイ・プログラムの全国初実施

テキサス州が1985年ごろ、高速道路で増え続けるゴミの清掃費用を減らそうと導入。沿道の住民の力を借りて、道路を美化してもらうもの。1989年カリフォルニア州で標識を見かけ、「将来日本においても必要になる仕組み」だとの確信を持ち、実施のタイミングを探る。



できる方法を考え抜いて、とにかく始める

国際文化村を名乗るに相応しいゴミのない町を作ろうと導入を推進。スポンサーの名が入った標識は道路法に抵触するとの徳島県の判断を押し、1998年6月に強行実施。その後、瞬く間に全国に広がる。

神山アーティスト・イン・レジデンス (K AIR)

住民主導で1999年に開始。国内外から3名のアーティストを約3ヶ月間招聘し、住民がお接待精神を発揮して制作活動をサポートする事業。



「アートによるまちづくり」の“二つの方向”

見学に訪れる観光客 ➡ 評価の定まった芸術家の作品を集める

制作滞在する芸術家 ➡ 滞在の満足度（場の価値）を高める

制作滞在の収益事業化を目指す

ウェブサイト『イン神山』（総務省モデル事業）

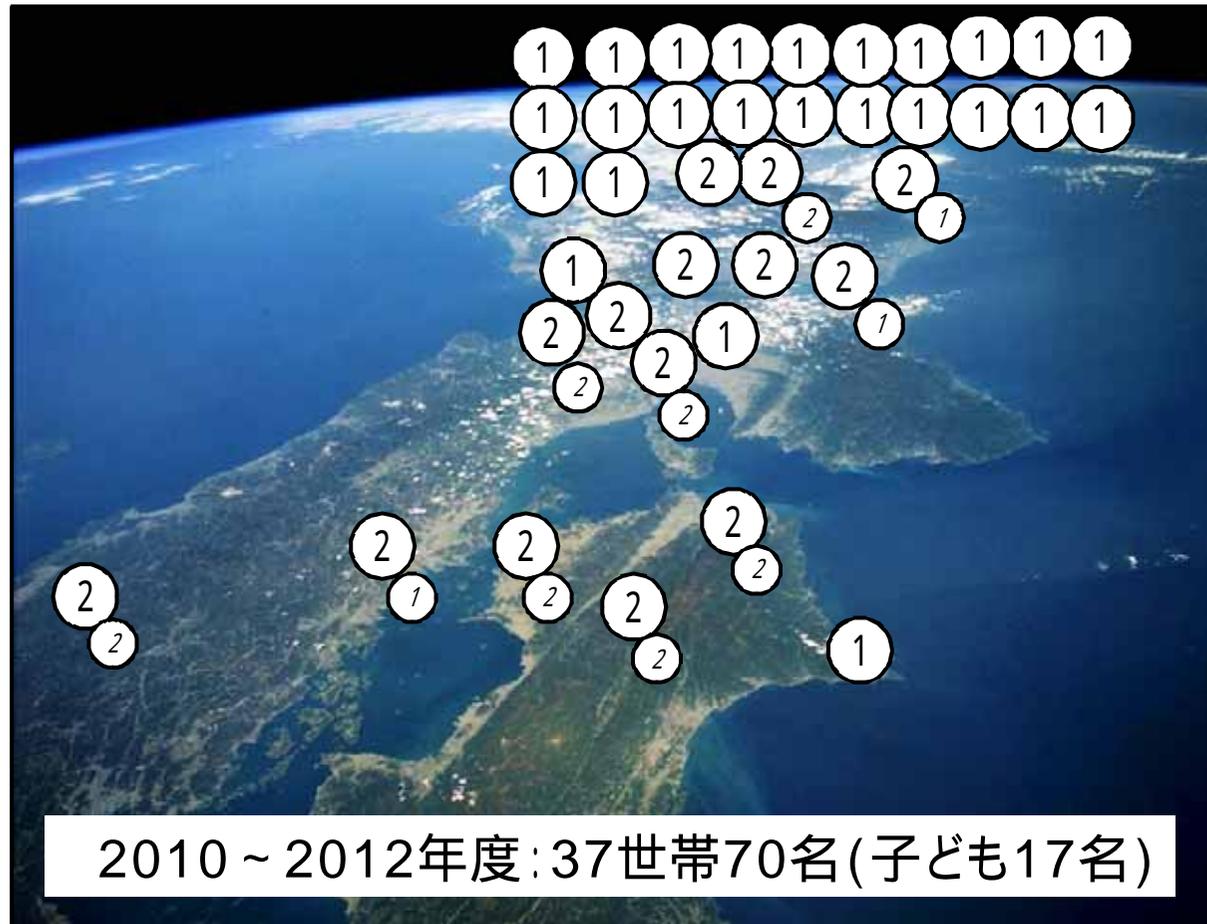
2008年6月オープン。アートプログラムの収益事業化を目指して、制作滞在のための情報などを充実を図ったが、予想外の反応が現れる。



古民家情報「神山で暮らす」 移住需要の顕在化

神山町移住交流支援センターの受託運営

町が直面している過疎化、少子化、経済の衰退といった課題の解決には、子連れの夫婦、若者、起業者の移住が不可欠。優先的に空き家を紹介。



移住者の平均年齢は30歳前後。起業を目指す若者も多い。

ワーク・イン・レジデンス(WIR)

空き家をツールに、スキルの高い移住者を誘致する逆指名制度

雇用がないから移住者を呼び込めないのであれば、仕事を持った人に来てもらえばいいのではないか。さらに、その職種が町の将来に必要とされるようなものであれば、必ず町に活気が生むだろう。



石窯で焼くパン屋さん
開業しませんか？



ウェブデザイナーさん
ここで事業を始めませんか！

手に職を持つ人材を集めることで、若者移住の可能性を切り開く

空き店舗改修プロジェクト

ワーク・イン・レジデンスによる商店街再生の一形態として、クリエイターを商店街に呼び込むためのモデル事業。長屋の一角の空き店舗を、住居とスタジオを兼ねた「ブルーベアオフィス神山」として全面改修。工事には、東京藝術大学の大学院生を中心としたボランティアと地元の大工が参加。この場がきっかけとなりサテライトオフィスが生まれる。



2010年8月



2010年10月

クリエイターが循環する場（映像作家・長岡マイル氏）

サテライトオフィス第一号誕生

「働き方に革新を起こす」という理念を掲げ、シリコンバレーのような働きやすい環境を探していた名刺管理サービス会社 Sansan 寺田親弘社長は2010年10月、「ブルーベアオフィス神山」の改修工事に関わっていた友人(建築家)の紹介で、神山町を訪問。即断で進出を決定した。



Sansan 寺田親弘社長



Sansan 「神山ラボ」

神山町がサテライトオフィス進出企業に期待することは、社員の移住や雇用・税収増などの即効性ではなく、「本業がこの中山間過疎地の神山においても成立することを証明してほしい！」

サテライトオフィスが切り開く新たな可能性

開設当初開発チームを重点的に派遣する予定だったSansanは営業部員がオンライン営業を行い、大きな成果を上げている。地方でも営業活動が日常的に可能になれば、日本の田舎は確実に変わる。



オンライン営業中のSansan社員



改修工事が進むプラットイーズ

2013年6月、寄井商店街に神山センターを開設するプラットイーズは、正社員4名を雇用し、1年後には25名程度が勤務する。さらに四国では初となる映像のアーカイブセンターを設置し、4K/8Kにも対応予定。

アートが発端となった「森づくり」

アーティストが地主の許可を得ないまま、私有林に無断で芸術作品を作ったことが発端。森の手入れ（間伐、枝打ち、下草刈り）を無償提供する代わりに、作品を森で自由に作らせてもらう協定を結ぶ。

異なる価値の交換によって、Win-Winの関係を構築



参加者は500円の費用(食材費・傷害保険料)を負担して「他人の山」を整備。「他人の山」から「みんなの山」への意識転換を図るとともに、自腹を切って町の山を整備する姿勢に共感する地域住民を増やす。

『神山塾』(厚生労働省・求職者支援制度)

グリーンバレーが主催する6カ月の職業訓練塾。イベントプランナーやコーディネーターを目指し全国から集まる若者たち(10名から20名)を対象に人材育成事業を実施。2010年12月に第1期を開始し、2013年6月からは第5期がスタート。



現在までに約60名の卒業生を送り出しており、うち約1/3が神山町内にそのまま留まり移住。最近ではサテライトオフィス企業に雇用されたり、起業を目指す若者も多い。

人材育成後の就職先としてのサテライトオフィス

「森と共に生きる暮らし方」探訪キャラバン

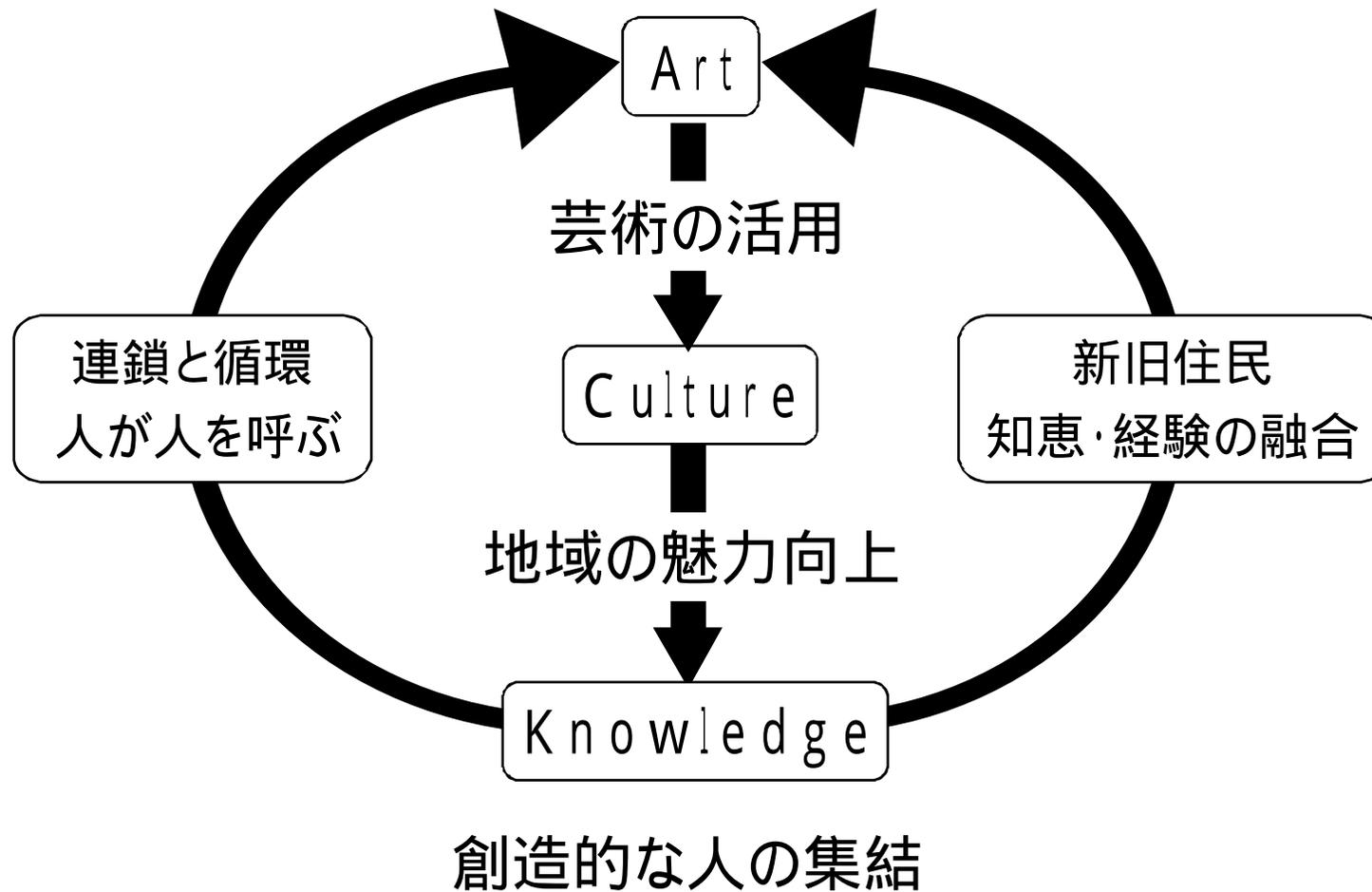
平成24年度 愛・地球博成果継承発展助成事業



神山町在住(移住者)の映像作家長岡マイル氏と、5人の外国人の作家がほぼ一年間に渡って、日本各地の「森と共に生きる暮らし方」を撮影・取材。タイトルバックは「八重の桜」でお馴染みのドローイングアンドマニュアル。上映会の運営は現神山塾生や卒業生やグリーンバレーが担当した「Made in Kamiyama」ドキュメンタリー。

クリエイティブな人が集まる場ができれば、恒常的に何かが生まれる！

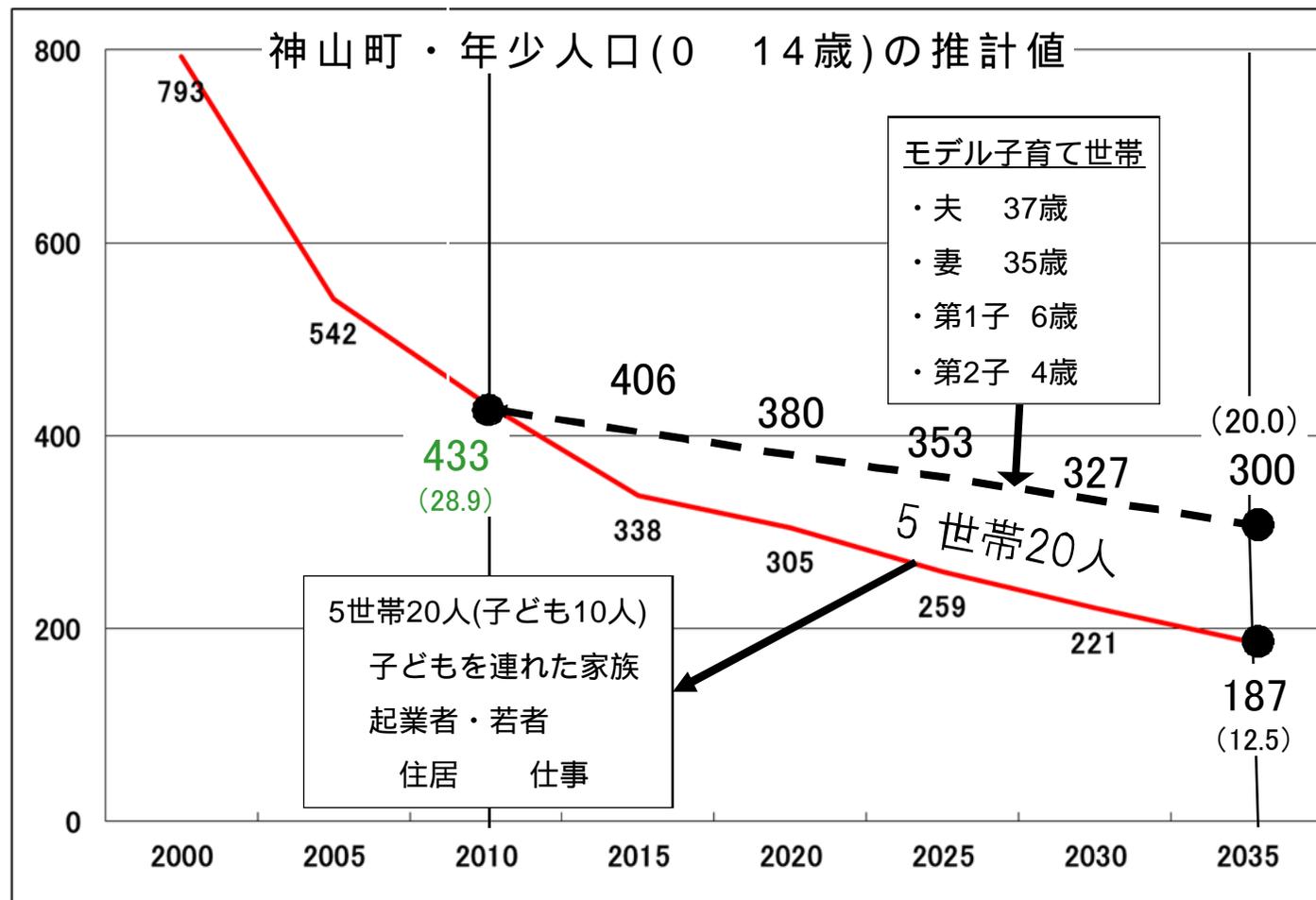
芸術・文化による地域再生 (forecasting)



そこに何かがあるかではなく、どんな人が集まるか！

創造的過疎による地域再生 (backcasting)

過疎化の現状を正しく理解し、的確に過疎化を進めていくこと。人口減少は人口減少と受け止めたうえで、人口構成を持続可能な形に変えていく。



※厚生労働省国立社会保障・人口問題研究所発表の「日本の市区町村別の将来推計人口」

ふるさとづくりの目指す方向

【ミッション】

日本の「田舎」をステキに変える！

【ビジョン】

人をコンテンツにしたクリエイティブな「田舎」づくり

多様な人の知恵が融合する場「せかいのかみやま」づくり

創造的過疎による持続可能な「地域」づくり